

# ラ・フォンテーヌ「狼と仔羊」における 権力、暴力、レトリック

ジャン＝ポール・オノレ

(翻訳 友谷知己<sup>1)</sup>)

数週間ほど前の大阪のある講演会で、私はフランスの大学で広く行われている国語の練習問題を実演してみました。即ち、テキスト分析と呼ばれる練習問題です。テキストの選択には提案を頂きまして、ラ・フォンテーヌの寓話、それも恐らくは最も有名なものの一つである「狼と仔羊」という寓話について、テキスト分析を行いました。すると私の友人のアドリアナ・横山教授が、これは必ずや関西大学の学生さんたちにも面白いものだ、と言ってくれまして、今回私は皆さんの前で、この傑作についてお話をする機会を得ることとなりました。お招きを心より感謝致します。

ラ・フォンテーヌというのは、フランスにおける最も重要な詩人のひとりです。ラ・フォンテーヌは、文体は全く異なりますが、ヴェルレーヌや、ユゴーや、アポリネールといった詩人たちと同じ水準の、第1級

---

1) [訳注] ここに訳出するのは、2016年6月30日、関西大学仏語仏文学会主催の講演会、ジャン＝ポール・オノレ「ラ・フォンテーヌ「狼と仔羊」を読む——小話の寛ぎと暴政への考察——」(Lire « Le Loup et l'Agneau » de La Fontaine. De la convivialité du conte à une méditation sur la tyrannie)、の原稿全文である。『仏語仏文学』掲載を期にオレノ氏は若干の加筆訂正を行ったが、最大の変更点はタイトルである。本原稿の仏語原題は Pouvoir, violence et rhétorique dans « Le Loup et l'Agneau » de La Fontaine. なお注は、[訳注]と断らない限りすべて原注である。訳者による補足的な言葉は、[ ] で示す。

の詩人です。

どうしてそう言えるのでしょうか？ 作家たちのうちには、同じジャンルを書く仲間の中で、極めて独特な文体を持っていて、かつその文体を完璧のレベルにまで高めてしまう人間、というのが存在します。ラ・フォンテーヌはそうした作家でした。寓話のジャンルで彼の文体を超えることは誰にも出来ませんでした。あとにはラ・フォンテーヌの模倣しか残されていないのです。

ラ・フォンテーヌの同時代にも、また後の時代にも、寓話作家というのは存在していました。イザック・ド・バンスラードや、ジャン＝ピエール・クラリス・ド・フロリアンや（単にフロリアンの名で人口に膾炙しています）、近年ですとジャン・アヌイといった作家たちです<sup>2)</sup>。しかし彼等は現在、殆ど読まれることがありません。ラ・フォンテーヌとの比較に、全く耐えないのです。それらは明らかに、ラ・フォンテーヌの単なる模倣であり、お手本のラ・フォンテーヌより数等劣っており、つまり彼等は、ラ・フォンテーヌが寓話というジャンルの完璧を達成してしまったことを示す証拠なのです。

恐らくはユゴーが唯一、彼なりの文体で、面白い寓話を書くことの出来た作家だったろうと思います（『懲罰詩集』の「寓話か歴史か」を私は思い浮かべるのですが、ともかく寓話はユゴーの好んだジャンルではありませんでした）。

ところがある時期、ラ・フォンテーヌは文芸評論家や批評家<sup>3)</sup>によっ

2) イザック・ド・バンスラード『四行詩イソップ寓話』（1678年）、ジャン＝ピエール・クラリス・ド・フロリアン『寓話』（1792年）、ジャン・アヌイ『動物歌集』（1968年）。

3) ジュール・ルメートルの以下のような評言を参照のこと。「ラ・フォンテーヌは偉大な詩人だ。しかしなんでまた寓話など書いたのだろう？」。ルメートルの問いにアルベール・チボーデは次のような解答をしてみせた。「何故ならラ・フォンテーヌには着想力がなかったからだ」。チボーデは、ラ・フォンテーヌの詩の

て、二流の作家だと看做されていました。ラ・フォンテーヌの仕事の大部分が寓話だったからです。そもそも伝統的に寓話というのは、通俗的文体によって書かれた小品と考えられていたのです（その反対が、頌歌や叙事詩といった大作です）。

つまり、寓話というジャンルの詩作品は、形式からして人生の一大事を語るようなものではなかったのです。ラ・フォンテーヌでは、次のような点にその消息が伺えます。

- 「狼と仔羊」では、くだけた言い回しが許容されています « Nous l'allons montrer tout à l'heure ».
- 「狼と仔羊」では、韻がかなり安易です « passé / pas né » ; « forêts / procès ».

がさらに、内容的な面で言えば、寓話が短い作品であるということが大事です。寓話とは道徳を語るのが常ですが、ジャンルとしては小品であるが故に（書簡体詩や風刺詩もそうだったのですが）、何よりも楽しいものでなければならなかったのです。

ですが、寓話が小品であるからといって、その形式に配慮がなされない訳ではありませんし、そこに深みがない訳でもありません。ラ・フォンテーヌがそのいい証拠です。ラ・フォンテーヌの寓話が、子供向けのものだと考えるのは大きな誤りです<sup>4)</sup>。『エミール』においてラ・フォンテ

形を天才的だと認めていたが、それは「単純な形式の普遍的な物語」のうちには存在しなかった、としている（参照、ルネ・ジャザンスキー『ラ・フォンテーヌと寓話集第1集』パリ、ニゼ書店、1966年、83-86頁）。

- 4) 時代状況に応じて書かれた短い献辞「王太子に」において、ラ・フォンテーヌはイソップの系譜に自らを置き、次のように記している。「私は動物を使って人間を教育するのだ」。『寓話集』は3巻にわたって刊行されるが、第2巻、第3巻はそれぞれ、モンテスパン夫人（王の愛人である！）、ブルゴーニュ公（王の孫）に捧げられている。が何と言っても「王太子のための文学」の代表格は、帝王学を

ヌを批判したルソーは、そのことに良く気付いていました。『寓話集』における、複雑な文体や独特の倫理観は、全く子供に向けられたものではないのです。子供という「小さな人々<sup>5)</sup>」のことを、ラ・フォンテーヌはどうやら全く眼中に入れていなかったのです。しかも、ラ・フォンテーヌはどうも子供が嫌いだったようなのです。

つまりラ・フォンテーヌ『寓話集』の真の読者とは子供ではなく、サロンと宮廷という社交界の大人たちであり、作家や芸術家たちであり、美文や名人芸を好む「貴顕紳士たち」であったのです。彼等は、次の二つのことを鑑賞し得る読者でした。

- 一つ、ラ・フォンテーヌの経験主義的かつ悲観主義的な道徳的考察のニュアンスです（実際こうした道徳は、通常は子供に与えられるものではありません）。
- 二つ、ある種の寓話が持つほめかしの側面、つまり政治的な目配せです（これは常にある訳ではありません）。

そして「狼と仔羊」は、こうした政治的ほめかしを含んだ寓話なのです。現代の多くの読者にとって、この目配せの意味は分からなくなってしまうしましたが、ラ・フォンテーヌが『寓話集』第1巻<sup>6)</sup>を刊行した

開陳するフェヌロンの小説『テレマック』（1699年）である。

- 5) 参照、ジャザンスキー、前掲書、29頁。自分の息子についてのラ・フォンテーヌの言葉。「そもそも私は、あの小さな人々に、かかずらうことの一切ない人間なのです」。参照、ラマルチヌ『詩的瞑想』序文における、ラ・フォンテーヌ『寓話集』の不道徳性と「底意地の悪さ」への辛辣な批判。「一人の老人の、過酷で、冷徹で、自己中心的な哲学。[...] この書物にはぞっとする。[...] 犬儒主義者の御託宣。[...] 憐れな戯言」。
- 6) 『寓話集』は1668年から1694年にかけて刊行された。現代版では『寓話集』は全12巻であるが、ラ・フォンテーヌが自作をそのように分割した訳ではない。寓話

1668年<sup>7)</sup>には、その意味は誰の目にも明らかでした。『寓話集』第1集に関するルネ・ジャザンスキーの書物<sup>8)</sup>が証明したのですが、つまりその政治的目配せとは、ニコラ・フーケ裁判のことなのです。

ニコラ・フーケとは何者でしょうか。フーケとは、王国の税収を一手に握る財務総監でした。優秀で、権力のある、野心家でした。素晴らしい取巻きにも囲まれていました（セヴィニエ夫人や、スキュデリー嬢等です）。フーケはまた、モリエールやラ・フォンテーヌといった多くの芸術家や作家の、友人にして庇護者にしてスポンサーでした（ラ・フォンテーヌには手当も出しています）。そしてフーケは、まだヴェルサイユが現在のような形ではなかった当時、イール＝ド＝フランスで最も美しい城、ヴォー＝ル＝ヴィコント城の城主だったのです。

1661年、フーケは逮捕されます。公金横領によって私服を肥やし、さらには王に対して陰謀をめぐらした、という廉です。ルイ14世は大臣の科尔ベールに命じて、ニコラ・フーケの権力を破滅させ、遂にはニコラ・フーケその人をも破滅させます。科尔ベールは、合法的・非合法的を問わず、ありとあらゆる手段を用いました。そしてニコラ・フーケの役職も影響力もすべて我が物としてしまいます。「狼と仔羊」の話を取りますと、科尔ベールはフーケを「貪り食った」のです。

フーケの裁判は3年かかります。それは極めてむごい、そして恐らくは極めて不当な裁判でした。財務総監フーケは有罪判決を受け、パリから遠く離れたピニユロルの城塞<sup>9)</sup>に幽閉されて残りの人生を送ります。

裁判の続く期間、ラ・フォンテーヌは庇護者フーケに、常に忠実さを

は時に別のテキストとともに刊行されることもあった。

7) 1668年から1694年までに第1集から第3集のみつつの書物に分けて、全12巻が刊行される。

8) ジャザンスキー、前掲書。若干深読みし過ぎの箇所もあるが、決定的な本である。財務総監フーケの綴りには二通りあり、ジャザンスキーは Foucquet と綴る（もう一つは Fouquet）。

9) ピニユロル（ピネローロ）は現在、イタリア、ピエモンテ州の町。

示しました。その忠実振りの証拠の一つが、『寓話集』第1集なのです。

第1集には、フーケ裁判への多くのほのめかしがあります。第1集の寓話とはつまり、単に道徳的寓話ではなく、政治的寓話でもあるのです。例えば「柏と葦」の場合、コルベールはセヴィニエ夫人から付けられていた渾名で呼ばれます。彼の過酷さと冷たさに由来する「北風」という渾名です。「狼と犬」もそうです。そして「狼と仔羊」という寓話もそうした政治的寓話なのです。

前置きの最後にもう一言だけ付け加えます。「狼と仔羊」は、教訓話としては全くオリジナルな作品ではありません。つまりこの寓話の物語も教訓も、ラ・フォンテーヌ独自のものではないのです。実際、ラ・フォンテーヌの寓話とはいずれもオリジナルではありませんでした。彼以前の、ギリシア・ラテンの作家、イソップやファエドルス<sup>10)</sup>といった多くの作家が、既にこの作品を扱っているのです。

「狼と仔羊」の独創性は別のところにあるのです。

- 「狼と仔羊」の独創性とは先ず、ラ・フォンテーヌと同時代の、ある歴史的・政治的エピソードへの目配せと、より広い意味での政治的暴力と正義との関係への思索というものの、絶妙なバランスが、言語によって表明されているという点にあり、
- 次いで「狼と仔羊」の独創性は、文体そのもののうちに存しています。語り手の声が具体化するその手法にあるのです。特にそれは混合詩、つまり、不規則な詩句の使用というテクニクにあります。

それでは作品を読んでみましょう。

---

10) それぞれ、紀元前6世紀、紀元後1世紀の作家。

## LE LOUP ET L'AGNEAU

La raison du plus fort est toujours la meilleure ;

Nous l'allons montrer tout à l'heure.

Un Agneau se désaltérait

Dans le courant d'une onde pure.

Un Loup survient à jeun qui cherchait aventure,

Et que la faim en ces lieux attirait.

« *Qui te rend si hardi de troubler mon breuvage ?*

Dit cet animal plein de rage ;

*Tu seras châtié de ta témérité.*

— *Sire, répond l'Agneau, que Votre Majesté*

*Ne se mette pas en colère ;*

*Mais plutôt qu'elle considère*

*Que je me vas désaltérant*

*Dans le courant,*

*Plus de vingt pas au-dessous d'Elle ;*

*Et que par conséquent, en aucune façon,*

*Je ne puis troubler sa boisson.*

— *Tu la troubles, reprit cette bête cruelle,*

*Et je sais que de moi tu médis l'an passé.*

— *Comment l'aurais-je fait si je n'étais pas né ?*

Reprit l'Agneau ; *je tète encor ma mère.*

— *Si ce n'est toi, c'est donc ton frère.*

— *Je n'en ai point. — C'est donc quelqu'un des tiens :*

*Car vous ne m'épargnez guère,*

*Vous, vos Bergers, et vos Chiens.*

*On me l'a dit : il faut que je me venge. »*

Là-dessus, au fond des forêts

Le Loup l'emporte, et puis le mange,

Sans autre forme de procès,

狼と小羊

強者の理屈はつねに通る。

すぐにそれを証明するでしょう。

一匹の小羊が澄んだ流れで

喉のかわきをいやしていた。

そこへすきっぱらの狼、何かいい獲物はないかと現れた、

ひもじさにこの場所に誘われて。

「いつからこんなに厚かましくなった、おれの水を濁すとは」

烈火のような狼は言う。

「このむこうみずの罰は重いぞ」

「殿さま」と小羊は答える。「どうか

お怒りにならないで下さい。それより

とくとご覧下さいませ、

わたしの喉をうるおす水は

閣下のところから

二〇歩もはなれた流れのもの。

従って、どのようにしても

閣下のお水を濁したりはいたしません」

「濁しておるとも」と残忍な獣は主張する。

「昨年、おれの悪口を言ったことも知っておる」

「どうしてそんなことが、生まれてもいないこのわたしに」

と小羊は必死。「まだ母乳を離れぬ身でございます」

「お前でなければ兄貴だな」

「兄は一人もありません」「じゃ、身内の誰かだ、

お前らはおれの悪口に容赦ないからな、

お前らと、羊飼と、犬の奴らは。

ちゃんと聞いているぞ、そのあだは討たねばならん」

こう言うと、狼は小羊をさらい、  
 森の奥へ。そして食べた、  
 ほかに何の正当な手続きもしないで。

ラ・フォンテーヌ『寓話集』第1巻の10（1668年<sup>11)</sup>）

先ず全体について指摘すべき点があります。この寓話は、ラ・フォンテーヌの寓話の殆どがそうなのですが、異音節です。異音節とは、各行が同じ音節ではない、ということです。

また、詩句の配置が定期的ではありません。各行の長さは、一見したところ気紛れに、全く突然に変化します。例えば、詩の冒頭部分の韻律構成は、

8音節、8音節、12音節、10音節、12音節、8音節、12音節

となっています。こうした詩句の長さとその配置の多様性というものが、所謂混合詩の特性です。伝統的な詩においてこうしたタイプの形式が用いられるのは、小品においてでした（寓話や風刺詩や書簡体詩など）。混合詩は、悲劇や叙事詩や頌歌といった大作には使われませんでした。

一般的にラ・フォンテーヌは、様々な面で名人芸を発揮する才能に恵まれた詩人だと考えられています。彼の技巧のうち特に注意すべきなのは、以下の二つです。

- 自由間接話法の使用（これは「狼と仔羊」には使われていません）
- そして、混合詩です。この、詩句の長さを常に変化させるという手法によって、ラ・フォンテーヌは、物語と文体の両面において、表現力の豊かさを生み出しているのです。

11) 〔訳註〕ラ・フォンテーヌ『寓話』窪田般彌訳、社会思想社、1969年、21-23頁。

寓話とは、台詞のやりとりを含んだ、道徳的短篇です。語りの部分でも、台詞の部分でも、混合詩という形式が、話の展開のスピードを遅くしたり、あるいはドラマチックに加速したりするのですが、さらにこの形式は、日常の自然な会話の調子を模しているのです。

実際我々の日常会話というものは、均等なブロックでなされている訳ではありません。我々は通常、8音節や12音節の詩句で喋ったりはしないものです。日常会話のリズムは、感情に応じて変化するものです。そしてラ・フォンテーヌが詩で表現しようとしたのが、その変化なのです。この意味で、混合詩の寓話は、頌歌などよりもはるかに散文的なのです。そしてこの散文的側面が、ラ・フォンテーヌにおける「通俗的文体」と呼ばれるものなのです。

つまり混合詩とは、流れるような言葉の淀みの無さであり、自然な言葉のやりとりの模倣なのです。混合詩は、寓話作者の文章が、日常会話的であり、かつ、寛いだもの<sup>12)</sup>であることを前面に示し、さらに登場人物の台詞が自然な発露であることを示します。このテクニックをラ・フォンテーヌが選んだということは、ラ・フォンテーヌが友人のフランソワ・ド・モークロワになした忠告を思い出させるものです。ラ・フォンテーヌはモークロワへの手紙の中で、次のようなモリエール礼賛の言葉を綴ったのでした。

いまやなんびとたりとも

自然を離れてはならぬのだ<sup>13)</sup>。

12) ラ・フォンテーヌ『寓話集』のこうした「言語的社交性」については、ドミニク・マンガノー『文学テキストのための言語学』第4版、ナタン書店、2003年、21-22頁。

13) 「モークロワ殿への書簡。ヴォーの祝宴の報告」(1661年)。ラ・フォンテーヌがこの手紙を認めたのは、ヴォーでひらかれた祝宴の翌日のことである。ラ・フォンテーヌはまだ知らないが、この宴こそが財務総監の身の破滅の原因となったのであった。

混合詩による表現力を示す例は、「狼と仔羊」の冒頭に既に示されています。最初の2行ははっきりしたコントラストを示しているのです。

強者の理屈はつねに通る。

すぐにそれを証明するとしよう。

第1行は12音節です。この韻律は、格言にも等しい、厳かな、肝に銘じるべき調子を、道徳的内容に与えています。ちなみに、「raison」というのはここでは、考える力、理性を意味するのではなく、理屈という意味で用いられています。

「強者の理屈はつねに通る」というのは、悲観主義的な格言です。ほぼ同時期に『箴言』を出版した(1665年)、ラ・ロシュフーコーに通じる世界であるとも言えます。この第1行は一般に広まっている考え、つまり通説を、遠慮会釈なしに覆します。ラ・フォンテーヌの格言は、暴力とは対話によって抑えられるし、コントロールされ得るという通説を否定しているのです。

第1行は、単に通説を否定するばかりではありません。ラ・フォンテーヌは、強者が「つねに」勝ってしまうのだ、というとても悲観的な世界観に我々をいざないます。これは、言葉の力に関するトポス——一般に流布する通念——にとつての驚きです(聖書の『箴言』[第25章15節]がいい例です。「[忍耐をもって説けば君も言葉をいれる、]柔らかな舌は骨を砕く」。「骨を砕く」というのは、頑ななものも砕く、という意味です)。

ラ・フォンテーヌは聖書とは全く別のことを言っています。論争における言葉の強さ——つまり論争的な有効性——とは、言葉の論理性ではなく、対話者たちの力関係にある、と言うのです。ただラ・フォンテーヌは単に、力は論理に取って代わる、とか、力にとつて論理など不要だ、とは言いません。そうではなくてラ・フォンテーヌは、もっと微妙な言い方で、力は必然的に論理と、つまり言葉と、隠微な関係を結ぶ、

と言っているのです。これが寓話「狼と仔羊」の示している内容です。

「強者の理屈はつねに通る」という第1行は、寓話の教え・教訓と呼ばれるものです。教訓が話の冒頭に置かれているのは、何らおかしいことではありません。寓話はイソップ以来人口に膾炙しているものなので、ラ・フォンテーヌの寓話には、サスペンスというものはありません。読者の誰もが、話の結末を知っていました。

です。ですので問題は、話がどのように語られるかということでした。興味は、物語の文体にあり、如何に中身が語られるかという点にあったのです。これについては、第2行が興味深い例です。

すぐにそれを証明するとしよう。

つまりラ・フォンテーヌは、「いま私が言ったことを直ぐに立証してみせる」と言っているだけです。ラ・フォンテーヌ『寓話集』の複数の編者<sup>14)</sup>が、この第2行を批判して、この行は埋め草に過ぎないと言いました。埋め草というのは、意味としては無価値な行で、単に大事な詩句と韻を踏むためだけに挿入された行のことです。ここでは、「meilleure / heure」と韻を踏んでいます。

ですが、私はそうは思いません。こうした意見は、『寓話集』の本質的な側面を見誤っているように思うからです。即ち、『寓話集』の文体的側面です。この比較的短い第2行は、韻のためだけに置かれたものではありません。二つの目的があった筈なのです。

・先ず、コントラストによって、12音節の第1行のリズムを際立たせ

14) 1987年のプレイヤード版の編者であるルネ・グロースとジャック・シフランは、冒頭の2行はラ・フォンテーヌによって後から付け足されたものであると推定しており、第2行は「申し訳ないが埋め草の感が否めない」と記している(675頁)。

る、という役目と、

- 次いで、語りの面でもコントラストをつける、ということです。「証明するでしょう」という言い方で、話者は自分の存在感を示し（フランス語では« nous »）、読み手との1対1の感じを出そうとしているのです。さらにこの表現上の工夫は、重々しくなされるわけではありません。それは軽やかに、自然に、寛いで、なされるのです。

第2行は詰まるところ、会話で言えば、「いま説明するから！」とか、「だから聞いてよ！」というような口調を、模倣しているのです。

かくして、第2行から既に、混合詩の表現力は見て取れる訳です。『寓話集』のトーンの多様さというものは正に混合詩によって生み出されているのです。

一匹の小羊が澄んだ流れて  
喉のかわきをいやしていた。

フランス詩のうちで最も有名な2行を挙げよ、と言われたら、この「狼と仔羊」の2行は、有力な候補の一つかもしれません。フランスの子供達は学校で「狼と仔羊」を暗記し、齢をとり、時に忘れてしまいます。けれど、この2行だけは、いつまでも胸に残るのです。

どうしてでしょうか？ 恐らくは、この2行の、牧歌詩的かつ原型的側面によるのだと思います。この寓話の舞台は、田舎の、理想郷のような、幸福な場所です。そこでは幸せは、具体的で、物理的です。「喉のかわきをいやしていた」« se désaltérer »というのは、単に「飲む」« boire »ということではありません。飽くまでも「渴きを癒す」ことなのです。この2行は謂わば、世界が澄み渡っていることを示しているのです。仔羊の白さ、水の透明度……。韻の（レ）という音までもが、共感的には、輝きを示唆しているように思えるのです。

ここまでは、この静かな世界を、何ものも乱してはいません。地上の楽園の雛形のようなもの、それが仔羊の世界です。何もかもが澄み渡っています。これから見ていきますが、仔羊は、言葉というものが、澄み切った水のようなだと思っています。言葉は真実を、素直に、適切に語るものなのです。

この寓話における仔羊のイメージは、また別の象徴的な側面を持っています。仔羊とは本来的に純粋な生き物であり、生贄としての動物ですが、ここではそこにもう一つの意味が担わされています。政治的意味合いです。フーケは仔羊のごとく無実であるにも拘らず、コルベールの残酷さの故に生贄にされてしまうのです。この点に関するルネ・ジャザンスキーの分析的射を射ています。この残酷で、凶暴で、無慈悲で、悪意に満ちた狼は、フーケ失脚にやっきになった財務大臣コルベールに外ならないのです。

ラ・フォンテーヌはまた、「狼と仔羊」と結末が多少違っていているものの、内容が殆ど同じ寓話を書いていました。「狐と栗鼠」という作品です。この寓話は草稿としては残されていましたが、ラ・フォンテーヌの生前に出版されることはありませんでした。何故なら、政治的なほめかしが明らか過ぎたからです。栗鼠は、フーケの紋章に描かれた動物だったのです。「狐と栗鼠」の出版とは、コルベールに対するあまりにも危険な挑発だったのです。ラ・フォンテーヌはよってそれを断念しました。結局「狐と栗鼠」は、彼の死後に刊行されました。

「狐と栗鼠」の代わりに、「狼と仔羊」をラ・フォンテーヌは出版しました。巧みな選択でした。17世紀の歴史的な文脈の中であって、この寓話の意味は、見る目のある人になら余りに明らかです。ところが同時にラ・フォンテーヌは、「イソップの物語をフランス語の韻文にしてみただけのことです、フランス中の学校で読まれている話ではないですか」、と言いつ張ることも出来たのです。

寓話の力がここにあります。明瞭な言外の意味という逆説的な言葉の機能を使って、何らかの政治的状況に対応するのです。ここから、コル

ベールの登場を見てみましょう。

そこへすきっぱらの狼、何かいい獲物はないかと現れた、  
ひもじさにこの場所に誘われて。

この狼の登場シーンにはいくつかの技巧が施されていて、ドラマチックなものとなっています。

- 先ず、12音節が再び用いられ、その1行の長さが、それまでの8音節の3行とコントラストを成しています。次いで10音節の行が現れますが、これは4音、3音、3音というリズムで素早く区切られます。これは一種のスピードアップのようなもので、狼の突如の出現をダイナミックに表しています。
- 所謂「語りの」現在形が用いられています。「狼が現れる<sup>15)</sup>」という現在形は、その2行上で用いられた半過去形との断絶を示し、舞台をより現実的なものとしています。
- 執拗に、狼が「すきっぱら」であり、「ひもじ」い、と強調しています。これによって、仔羊の命運は定まってしまったことが暗示されます。仔羊は食べられてしまうのです。イソップの話を忠実に守っている訳ですが、より広く、ある種の紋切り型にも即しています。つまり、狼が捕食者で、羊がその獲物であるという紋切り型です。

ところで最も興味深いのは、イソップにおいても、ファエドルスにおいても、ラ・フォンテーヌにおいても、ここには、辿るべき道のり〔手順〕がある、という点です。狼は仔羊を即座に食べてしまうのではなく、食べてしまう前に狼は、仔羊に話をする欲求に駆られるのです。

この寓話が明らかにするのは、「強者の理屈が〔…〕通る」ことです

---

15)〔訳注〕窪田訳では過去形だが仏語原文は現在形。

が、同時に、強者というものが理屈をこねる欲求に駆られることがある、論理立てて語る欲求に駆られることがある、ということも、示しています。何故そういう気分になるかを、これから考えてみます。

「いつからこんなに厚かましくなった、おれの水を濁すとは」

烈火のような狼は言う。

「このむこうみずの罰は重いぞ」

狼の台詞の1行目は、登場の時と同様に、12音節です。獣の威圧的な雰囲気表現するこの長い1行は、修辞学の用語を使うなら、狼の支配者たるエートス〔倫理的イメージ〕を表しています。

第7行と第9行は12音節の行ですが、それらはより短いリズムの語り手の言葉（「烈火のような狼は言う」、8行）で隔てられています。つまり、混合詩の効果がここにもあるのです。長い行、短い行、長い行と並列することで、それぞれの行が、異なるスタイルを発揮しています。

狼と仔羊のコントラストが最も際立つのは、「烈火のような狼」という語句によってです。この「烈火のような<sup>16)</sup>」という形容は、狼のその場の様子というより、寧ろ狼の本質と解すべきです。仔羊が純粹で、真っ白で、無実である一方、狼はその本質として憤激と残酷に取り憑かれた存在なのです。対話は必然的に、避けがたい結末に向かっていきます。

政治的ほめかしの面について言いますと、この「烈火のような」獣がコルベールを暗示しているとする、恐らくここには、寓話における誹謗文書の文体の影響が看取れるのです<sup>17)</sup>。

16)〔訳注〕他の既訳では、「怒りに燃えて」（ラ・フォンテーヌ『寓話』今野一雄訳、上巻、岩波書店、1972年、86頁）。

17) 烈火のようなという言葉は、「恨みのこもった怒り、激昂」という意味で、当時としては陳腐なものである。しかしルネ・ジャザンスキーは、コルベールがフーケを迫害した様が「烈火のよう」であったという複数のテキストを指摘している。第8行は、誹謗文書の文体に触発されているのである。ラ・フォンテーヌは『寓

狼は、かくて、理屈を述べますが、その立論の最初の特徴は、狼の欺瞞を曝け出すという点にあります。実際狼は、仔羊の性格が「厚かまし」と「むこうみず」と断定しますが、これは羊に通常与えられる性質とは相容れないものなのです。

また指摘すべきことは、仔羊に既に刑が宣告されていることです。「このむこうみずの罰は重いぞ」

象徴的な意味について考えてみましょう。この寓話には、虚偽の告発による裁判というものが描かれています。またこれは、所謂、裁判の真似事という事態を描いています。裁判はまだ始まってもないのに、被告は既に有罪なのです。これは正しく、フーケ裁判の展開そのものでした。王、つまり行政の長は、裁判官たちに圧力をかけ、フーケの罪が可能な限り重くなるように働いたのです。しかも王は、裁判が終わると刑は不十分であると考え、自ら裁判官となって刑をさらに「当時の言葉で」[広げ]ました、つまり重くしたのです<sup>18)</sup>。

仔羊は、ですが勿論、自己弁護します。そして彼の反論の特徴は、彼が弁論というものに信を置いているということです。

「殿さま」と小羊は答える。「どうか

お怒りにならないで下さい。それより

とくにご覧下さいませ、

わたしの喉をうるおす水は

閣下のところから

二〇歩もはなれた流れのもの。

---

話』に先立つ数年以前のフロンドの乱の時期に、誹謗文書マザリナードの気風、文体、大胆さに接していた。1621年生まれの人・フォンテーヌは、マザリナードが流通していた1648年から1653年にかけて、30歳前後である。

18) 政治的な意味合いで「裁判の否定」[不公平]とは、司法官の決定に行政権が威圧的に介入することを指す。しかし当時は、王が自由裁量権を有しており、刑罰を重くすることが出来た。

従って、どのようにしても

閣下のお水を濁したりはいたしません」

仔羊の台詞には、弁論・雄弁というものに典型的な、いくつかの興味深い特徴があります。これは弁論術に基づく言葉であって、やや教科書的ですらあります。

- 仔羊の台詞は、比較的長い（8行）弁論です。言語と論理の使用に対して、仔羊が深い信頼を持っていることの証拠です。
- 仔羊の最初の言葉は、当時の学校教育で教えていたこと、つまり、好意の獲得 *captatio benevolentiae* から始められます。好意の獲得とは、聞き手に好印象を持ってもらうような言葉を先ず述べる、ということです。仔羊はそれで、狼の善意に訴えかけます（お怒りにならないで下さい）。そして最上級の丁寧語を用います。呼びかけの「殿さま」と3人称での語りです。
- 仔羊はまた、聞き手の理性に訴えかけます。「ご覧下さい」という動詞 « *considérer* » は、論理を重んじる人間の言葉そのものです。ある命題を客観的に提示しておいて、次いで結論を導こうとするのです<sup>19)</sup>。
- 仔羊は、彼の立論の重要なポイントを強調します。川には流れがある、という点です。この強調はまた、韻律上は4音節の1行で、際立っています。「*Dans le courant*」[流れのもの]。
- さらに仔羊の弁論は、暗黙のうちに三段論法で成り立っています。次のような論法です。「水の濁りが川の流れを遡ることはない」「ところで、私はあなたよりも下流にいる」「よって私はあなたの水を濁すことはない」
- 仔羊はまた、論理構成の各段階で、接続詞を巧みに使っています。「それより」「従って」

19) *considérer* という動詞は、数学に頻繁に用いられる。

- 仔羊はその推論から得られた結論によって、一つの命題を証明し終えた、と考えています。そしてその命題は、狼の言葉と真っ向から対立しています。狼はこう言っていました。「いつからこんなに厚かましくなった、おれの水を濁すとは」。短い8音節の1行で、仔羊ははっきりと答えます。「閣下のお水を濁したりはいたしません」

歴史的背景に即して言えば、おそらくここには、裁判官たちを前にしてフーケが振るったという弁舌、論理的熱弁の様子が反映されていると考えることが出来るでしょう。セヴィニエ夫人の証言も残っています。

しかしそれは、テキストの意味の全て、ではありません。テキストの意味とは、テキストが象徴するものと伝記的な事実とをピッタリ照合させること、で終わってしまうものではないのです。「狼と仔羊」がいまなお我々にとって意味のある寓話であるのは、テキストが、普遍的な教訓的価値を保っているからなのです。「狼と仔羊」は一つのテキスト、即ち意味の織物であって、我々はそこに、読解の二つのレベルを見るべきなのです。一つは歴史的レベル、もう一つは歴史を超えたレベルです。

それがラ・フォンテーヌの意図したことなのかどうかは分からないのですが、仔羊の純粹さと言葉への信頼には、愚かさに通ずるものがあるように思います。賢い草食動物なら必ず、さっさと逃げ出していたでもあろう場面で、この仔羊は弁舌を振るって、さらにその効果を信じています。つまり仔羊は、真理が言葉によって明らかにされる時、真理は論争における強力な武器なのだと信じているのです。

狼はそんな仔羊に証明をしてみせます。言葉は透明ではないこと、言葉には得体の知れぬ悪辣な顔のあること、言葉は現実世界では純粹理性の伝達手段などではなく、不当な権力の道具である、ということです。

狼は3音節で答えます。「濁しておるとも」。この返事は、仔羊の長い弁論と強いコントラストを見せています。たった3音節の返答によって、仔羊の弁論術の一切が無に帰してしまったかのようなのです。狼の返答

が短いのは、それが権力者の理屈だからです。こういう理屈です。「そう言っているのは私だ。よって正しい」。こうした権力者の理屈の有効性とは、言葉と論理それ自体の価値とは無関係です。その理屈の論争上の有効性とは、発話者の腕力によって示されているのです。

狼にこうした権力者の理屈をこねさせることで、この寓話の意味は明らかです。二人の登場人物の間の言葉の応酬も裁判も、うぶな仔羊が信じているように、理性に基づいてなされているのではなく、暴力に基づいてなされているのです。暴力は狼の領分です。このことは「残忍な獣」という表現がよく示しています。言葉に信を置く仔羊には気の毒ですが、真理の言葉などというものが、力関係を破棄することなど出来ないのです。仔羊は、云うならば、世界を間違えたのです。

しかしながら、如何に論理的には許し難いものではあっても、権力者の理屈も、一つの理屈には違いありません。狼は理詰めで語る欲求に駆られているのです。何故でしょう？ 何故なら狼にとっては、仔羊を単に食べてしまうだけでは、物足らないのです。狼はそれを、法の正義の見かけとともに行おうとしているのです。

つまりこの寓話が表示しているのは、権力と言葉との複雑な関係なのだ、ということが分かります。権力は単に力を行使しようとするだけではありません。権力は長続きしようとします。そのために権力には、言葉が必要なのです。

「濁しておるとも」と残忍な獣は主張する。

「昨年、おれの悪口を言ったことも知っておる」

狼の二つ目の論点です。「去年お前は、おれの悪口を言った」。最初の論点（水の濁り）と、話は全く別になってしまっています。これは、フーケの裁判のような告発裁判というものを象徴的に描き出しています。告発裁判とは、被告に不利なことを何でもかんでも並べ立てる裁判のこ

とを言います。

ここで狼は、仔羊のわずかな過ちについて咎め立てます。しかも既に時間的に遠い過去の、「悪口」です。そもそも悪口が犯罪であるとは到底思えませんが、狼の言葉に満ち溢れている威嚇的方によると、悪口も犯罪行為の一つであるように見えてくるのです。威嚇的というのは、聞き手に圧力をかけて黙らせてしまう全ての談話の手段、という意味で私は使っています。この寓話でラ・フォンテーヌは、忠実にイソップとファエドルスのテキストに従っているのですが、そこに彼固有のやり方、ニュアンス、調子を付与しています。例えば登場人物の台詞の対称的な進展の仕方です。

「どうしてそんなことが、生まれてもいないこのわたしに」

と小羊は必死。「まだ母乳を離れぬ身でございます」

ここで指摘出来るのは、仔羊の雄弁が徐々に後退しているということですから。仔羊はその饒舌を、長々と返答を展開する力を、なくしてしまいました。数行上とは、全く別の事態となっているのです。論理構成も力を失っています。

- 今や仔羊は、数行上のような正面衝突の形ではなく、[どうして、と] 疑問形で自己の弁護を試みています。
- 論理の展開に、仔羊は接続詞の「もし」« si »を使っています（生まれてもいないとしたら）。生まれてもいないのだから *puisque* と言えばより論争的なのに、としたらという仮定の意味に彩られた *si* を使っていますから、これはもう、明白な理由となっていません。仔羊の言葉には、恐れが入り込んでいるのです。

ついでに指摘しておきますが、美しく、具体的で、模倣的な半諧音（母音反復）があります。「まだ母乳を離れぬ身でございます」。« Je tête encor

ma mère »のエーの音の連続が、仔羊の叫び、エーという鳴き声を響かせているのです。仔羊の理屈は、仔羊の叫びに成り果てているのです。

「お前でなければ兄貴だな」  
 「兄は一人もありません」「じゃ、身内の誰かだ、  
 お前らはおれの悪口に容赦ないからな、

4行の12音節に続けて、ラ・フォンテーヌは8音節の1行を入れ、次いで10音節の行を入れます。事態はドラマチックに急展開していきます。短い行が今や支配的となっているのです。

この演劇性はまた、台詞の素早い連続によっても示されています。「兄は一人もありません」「じゃ、身内の誰かだ」。この行の冒頭の、絶望に満ちた4音節の言葉「兄は一人もありません」が、仔羊の最期の台詞となります。仔羊の論理性と雄弁は崩壊してしまったのです。仔羊の言葉は消えるのです。

狼の言葉の暴力、狼が言葉そのものによって演出する暴力、そして自分を待っている運命を指し示す暴力を前にして、仔羊は、異議申し立てをする力すら無くしてしまったのです。

またここで気付くのは、ラ・フォンテーヌの「狼と仔羊」では、仔羊の言葉が徐々に短くなっていくのに対して、狼の言葉が徐々に支配的になって行くということです。仔羊が言うべき言葉をなくしていく一方、論証的な弁舌を振るうのは狼の方なのです。

それは4行にわたっています。この寓話では、先程も申しましたように、登場人物の台詞の分量は対称的に上下して行きます。この段階になると、仔羊は口を噤み、狼が説明を始めます。威嚇的な言葉は、自らの論証能力だけでなく、言葉とは別の力〔腕力〕に寄りかかって、合理的な言葉を押しつけ、自説を展開して行くのです。

ところが、そうであるにも拘らず、それはなお、言葉であるには変わ

りがありません。しかも、いい加減なものでもありません。狼の言葉は、正義を引き合いに出しています。仔羊と同様の、論理と弁論術の装いを凝らすのです。論理性を示す接続詞「だから donc、というのは car」が、これ見よがしに用いられます。

「お前でなければ (donc) 兄貴だな」  
 […]「じゃ (donc)、身内の誰かだ、  
 (Car) お前らはおれの悪口に容赦ないからな、

つまり狼もまた、言語が生み出す本当らしさを必要としているのです。狼の場合それは倒錯的な本当らしさではありますが、それにしても狼は、弁論術と論理的形式を必要としているのです。

お前らはおれの悪口に容赦ないからな、  
 お前らと、羊飼と、犬の奴らは。

狼の理屈は、「お前」から「お前ら」に移り、仔羊個人をある不良集団と同一視します。これは法廷の弁論術でいうところの作為的同一視（アマルガム）です。狼は必要に応じて——つまり自分の言葉に最低限の本当らしさを付与するために——、ある原始的な掟を持ち出します。即ち、連帯責任の原理です。それによれば、一人一人の個人はみな、共同体の行いの責任を取らねばならないのです。

道徳的に見て如何におぞましいものであっても、繰り返言いますが、これはそれでも一つの、法廷的な理屈となっています。狼は食欲だけでなく、論証欲を持ち合わせているのです。

ちゃんと聞いているぞ、そのあだは討たねばならん

これが狼の最後の論点です。因みに五つ目です。狼が如何に説得に熱を

入っていたかが分かります。この論点で狼は、自分の振る舞いの動機をすりかえてしまいます。彼の食欲は、仇討ちという大義名分の後ろに全く隠されてしまうのです。狼の行動は、法的な見地から検討すべきものとされ、結局、合法化されます<sup>20)</sup>。狼の持ち出す掟が、如何に原始的なものであってもです。

さらに狼は、この復讐を自らの意図によるものではなく、何らかの必然性によるものだとします。自分の外にあるその必然性に、狼は服従するのだと言います。つまり、自分が仔羊を貪り食うのは法に命じられたからだ、と言い張るのです。これを表しているのが、不定代名詞の主語 on です (ちゃんと聞いているぞ<sup>21)</sup>)。この on は、まるで共同体の要望を示すかのようなのです。非人称表現の il faut (ねばならん) も同様の意味で用いられています。

恐らくは1660年代の終わり、フーケ裁判を経たフランスでは、これらの文章には独特の響きがあったに違いありません。殊に「ちゃんと聞いているぞ (おれはそう聞いている、人は俺に言ったのだ)」という表現が映し出している、権威に従う狼というのは、当時明らかなほめかしたのです。コルベールが、自分にとってライバルでありかつ危険人物だったフーケを迫害したのは、自己の欲望に従ったからというだけではありません。コルベールは王命に従っていたのです。

こう言うと、狼は小羊をさらい、  
森の奥へ。そして食べた、

20) 復讐と法の正義の関係については、アイスキュロス『慈悲の女神たち』の素晴らしい結論部分を再読すること。復讐は法によって否定されるのではない。都市の新たなステップのために、復讐は法へと前進するのである。

21) 〔訳注〕他の日本語訳でも「おれはそう聞いている」(『寓話』今野一雄訳、上巻、87頁)とあるが、仏語原文は« On me l'a dit »で、これを直訳すると、「人は俺に言ったのだ」となる。

ほかに何の正当な手続きもしないで。

この最後の3行は、寓話の冒頭と対照的です。そして寓話冒頭に対する回答となっています。我々読者は、光に満ち、幸福で、牧歌的な自然の枠組みから、暗く暴力的で悲劇的な世界に移ったのです（森が複数形なのは、そこが不分明で混沌としていることを示しています）。ユートピア的な明るい世界では、言葉と理性とを繋げれば、人を説得することが出来ました。が我々読者はそこから、言説が力関係に依存する現実主義的で不確かな世界に連れられて来たのです。

つまり、この寓話は我々に次のようなことを語っているのです。暴力と、説得的な装いを持つ言語とは、排除し合うものではない、ということです。実に危険なやり方で、言葉と暴力は結ばれます。その結果、言葉は暴君の権力に法的な支持を与えます。それこそが、暴君の権力を制度化してしまうものです。

この辺りのことを示しているのが、「ほかに何の正当な手続きもしないで」という1行です。私はこの手続き [形式] « forme » という言葉こそが、この寓話の最も重要な言葉の一つだと思っています。暴力が如何に横暴なものであろうとも — そしてラ・フォンテーヌがここで考えているのは、国家の暴力のことなのですが —、暴力は理論武装を必要とし、言語を必要としているのです。さもなければ暴力は、持続的に行使され得ないのです。そんな暴力の行使の横暴な手続きに、誰も目を眩まされることはありません。が兎にも角にもその手続きは、暴君の暴力を合法化したかのように装うのです。それが囲い込むのは、正義と法と言葉です。我々はここで、ジョージ・オーウェル『1984』や、ヴィクトール・クレムペラー<sup>22)</sup>や、近代の独裁政治を思い浮かべることが出来ると思います。

22) ヴィクトール・クレムペラー (1881-1960) は、ドイツの言語学者。1947年の『第三帝国の言語』は1996年に仏語訳された (アルバン・ミシェル社)。同書でクレ

狼は単に、小川のほとりにやって来て、仔羊をさらって、貪り食うのではありません。狼はそうした振る舞いの、手続き上の（形式上の）正当性を欲しがっているのです。何故ならそれこそが、彼の捕食者としての行動を正常なものとし、彼がこれからも羊を食べることの保証となるからです。こうした訳で狼もまた、弁論術を必要としたのでした。

仔羊とはいうと、その巧みな語りの技法にも拘らず、彼は恐らく弁論術を何一つ理解していなかったのです。仔羊は、弁論術の機能とは真理を示すことであり、真理にこそ言葉の有効性が由来するのだと考えていました。一方狼は、仔羊よりも優れた弁論家です。狼は自身の恐るべきエートス [倫理的イメージ] を働かせ、言語を使って、単なるうわべだけの、法的なもっともらしさを作り出すことすら出来たのです。

「狼と仔羊」という寓話には、かくして、二つの側面があります。一つ目は、この寓話が、個別の歴史的状況に依拠しているということです。そのためにこの寓話は、元のモデルの探せる詩作品となっており、また誹謗文書に極めて近いものとなっています。二つ目は、ギリシアの寓話から引き継がれた側面です。これがために「狼と仔羊」は、物語が特殊なもの、限定的なものであることを免れ、古典古代のみならず、味わい深く、普遍的で、政治的な考察となり得たのです。

暴力に支配された世界における理性的な言葉の限界を、この寓話は描いています。この寓話は、強者と弱者の暴力的な関係を語るだけではありません。理性と真理に基づいた言説の限界と、強者が自分に都合なドクサ [それらしさ] を形成する様を描いているのです。「狼と仔羊」は、政治的暴力に関する、まことに偉大な小品なのです<sup>23)</sup>。

---

ムペラーはナチスのレトリックを分析している。

- 23) 「狼と仔羊」には二つの比較すべきテキストがある。一つはパンスラードの同じタイトルの作品である。パンスラードの方が抽象的で、寓意も無味乾燥で、小説としての血肉が欠如している。特に表現の全ての面においてである。二つ目は、ラ・フォンテーヌ自身の「ライオンと共同で事業をした牝ウシと牝ヤギと牝ヒツジ」である（『寓話集』第1巻6）。『寓話集』を通じて最大の暴君の象徴である

(パリ東マルヌ・ラ・ヴァレ大学准教授)

---

ライオンの話である。この暴君は、モンテスキューが描くような東洋の専制君主を思わせる。己れの欲望と「気紛れ」によってのみ統治する君主は、手続き上の正当性をも不要だと考えている。ライオンの最後の理屈は、彼の権力の本質を示している。一方、「狼と仔羊」の狼は、よりギリシア的な暴君の面影を宿している。ギリシアの暴君は、政治的な集会がある毎に、「棍棒持ち」という衛兵を送り込んで、事態をコントロールしていた。

〔参考資料〕

## LE LOUP ET L'AGNEAU

Le loup querellait un agneau  
 Qui ne savait pas troubler l'eau ;  
 À tous coups l'injuste puissance  
 Opprime la faible innocence.  
 L'agneau n'alléguait rien pour sa juste défense,  
 Qui ne mit le loup dans son tort ;  
 Mais il ne savait pas qu'opprimer l'innocence,  
 C'est le droit du méchant, quand il est le plus fort.

Isaac de Benserade (1612-1691) , *Fables d'Ésope en quatrains* (1678).

## 狼と小羊

狼が仔羊に文句をつけた。  
 仔羊が水を濁すことなどなかったのに。  
 いつも不当な権力は  
 弱き無実の人々を虐げる。  
 仔羊の正当なる弁解の一言一句が  
 狼の不正を鳴らした。  
 しかし仔羊は知らなかった。無実の者の虐待は  
 悪人が強者である時、悪人の権利であることを。

イザック・ド・バンスラード (1612-1691)、『四行詩イソップ寓話』(1678年)

LA GÉNISSE, LA CHÈVRE ET LA BREBIS  
 EN SOCIÉTÉ AVEC LE LION

La Génisse, la Chèvre, et leur sœur la Brebis,  
 Avec un fier Lion, Seigneur du voisinage,  
 Firent société, dit-on, au temps jadis,

Et mirent en commun le gain et le dommage.  
 Dans les lacs de la Chèvre un Cerf se trouva pris ;  
 Vers ses associés aussitôt elle envoie,  
 Eux venus, le Lion par ses ongles compta,  
 Et dit : Nous sommes quatre à partager la proie ;  
 Puis en autant de parts le Cerf il dépeça ;  
 Prit pour lui la première en qualité de Sire ;  
 Elle doit être à moi, dit-il, et la raison,  
 C'est que je m'appelle Lion :  
 À cela l'on n'a rien à dire.  
 La seconde, par droit, me doit échoir encor :  
 Ce droit, vous le savez, c'est le droit du plus fort.  
 Comme le plus vaillant je prétends la troisième.  
 Si quelqu'une de vous touche à la quatrième,  
 Je l'étranglerai tout d'abord.

La Fontaine, *Fables*, I, 6 (1678).

ライオンと共同で事業をした牝ウシと牝ヤギと牝ヒツジ  
 牝ウシと牝ヤギと、妹の牝ヒツジが  
 近在の殿さま、荒々しいライオンと、むかし、  
 共同で事業をはじめ、  
 儲けも損も分け合うことにしたそうだ。  
 牝ヤギの罠にシカがかかった。  
 すぐに牝ヤギは、仲間に知らせてやった。  
 みんなやってくると、ライオンは爪で数をかぞえ、  
 「われわれは四匹で獲物を分ける」と言い、  
 四つにシカを切り裂き、  
 まず自分が、殿さまの資格で、一つを取って、こう言った。  
 「これはわしのものだ、その理由は、

わしがライオンという者だからだ。  
それにはだれも文句はあるまい。  
二つ目も、権利によって、わしのものになる。  
その権利とは、おまえらも知っている、強者の権利だ。  
いちばん勇気のある者として、わしは三つ目を要求する。  
おまえらのだれかが四つ目に手を出したら、  
わしはすぐにそいつを絞め殺してやる。」

ラ・フォンテーヌ 『寓話集』 第1巻の6 (1668年)<sup>24)</sup>

---

24) 〔訳注〕『寓話』今野一雄訳、上巻、77-78頁。